

## 孤独で自由な生活

— 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を読んで

もしかすると誰の心の中にも、冷酷な世の中を逃れるための世界の終りが隠れているのかもしれない。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は初めて読んだ村上作品で、今のところ一番のお気に入りでもある。初めて書名を見るなり、心の中のある片隅が喚起されるのを感じた。冷酷で暗く、しかし理想的で自由な片隅だ。「感覚を訴える言葉は非常に困難なもの。」しかしこの本の中では言葉にしがたい感情だけでなく、冷酷で理想的な現実と、手かせ足かせをつけられたまま踊り出す人生も見つけた。

第二次世界戦争の後に生まれ育った村上春樹は川端康成の世代作家とは文章の風格の上で明らかな違いがあり、彼の文章には「土と血の臭いがしない」と言う評論家もいる。しかし、これは日本の文学が第二次世界戦争の後に生じた変化の表れで、世界との融合と相互作用を象徴するものだと思う。村上はその「異質感」を持つ小説の中に日本文化に特有なもの寂しさとうら寂しさを注ぎ込んで、自分のやり方で読者の心の中の塵や雪を払い、どのように生きるべきかを示してくれる。

自由と孤独。

現実都市のハードボイルド・ワンダーランドで、主人公は計算士として積極的に働いて貯金をしており、「ゆったりと落ち着いて時間を過ごし、ギリシャ語とチェロを学ぶ」ことをめざし、詩情を持って自由に生活している。このように明確な生活の目標と余裕の追求は今 20 歳の自分には欠けている。20 歳は 35 歳の主人公とは比べられない。20 歳ならまだ無限な可能性を持っているが半分の圧迫と束縛は受けている。自分の社会的価値の実現を試みようとして夢を抱いており、現実の制限と自己の能力の不足に気づいて憂うつだからだ。30 年の蓄積を経てこそ何が自分に属する生活で何が自分に属する自由なのかははっきりと分かるのかもしれない。今の自分は主人公の人生の軌道の中で、将来のさまざまな可能性の手がかり、何のために生活しているのかをこっそりと捉えることしかできない。その目標が簡単であろうと複雑であろうと、卑しいか偉大かを問わず。

孤独は今の自分にとって非常に重々しいがだからこそ十分に貴重なことに思える。一生ついてくる手がかりになるからだ。村上文学に「土」の臭いがしないと言われるのは、彼の作る孤独の美学がこのように淡く悲しいもので、ずっと民族の影を帯びているからだ。

「それなのに私にはたった一本のくすの木とたったひとつの雨ふりさえ理解することができないような気がしたの。永遠にね。たった一本のくすの木とたったひとつの雨ふりさえ理解できないまま、年をとって死んでいくんじゃないかってね。そう思うと、私はどうしようもなく淋しくなって、一人で泣いたの。」「私」は身体と精神の苦難を堪え忍びなが

らこのように述べた。このような寂しさと空虚さ、理解できないことの痛みは骨髓の奥まできわめて深く達し、きわめて痛い。「二人で同じベッドに寝ても、目を閉じるとひとりぼっちで……」一生をかけて絶対的な理解を求めても、恐らく永遠にできないということに気づく。人と人、人と物の間が越え難く、距離の存在が必要でさえあるからには、ありのままに誠意な孤独は一段と心からの付き添いを大切に、孤独の中から釈然と解放される。ハードボイルド・ワンダーランドにいる「私」の一人暮らしには独特な趣があり、気の向くままスーパーでのショッピングの時間を楽しみ、時折生命の旅人を盛りだくさんの夕食でもてなしている。村上春樹は個人の孤独感を描写することに力を尽くして、誠実にそうした感覚を言葉にして読者と分かち合っている。私達が絶対に理解できない以上、少なくとも同じ気持ちを分かち合うことができるという感情の上の共鳴は無意味な絶対的な理解よりも実際的で有効で、安心でき慰めになる。

孤独により築かれた壁は私だけに属する世界の終りへと変化する。ハードボイルド・ワンダーランドにいる「私」は計算士として思いがけず利害が衝突する集団の争いに巻き込まれ、力強く非情な科学の前に永遠の眠りに入ってしまう。たとえ主人公が本分を守っても、やはり罪がなくても災難に遭遇する。「私がどんな風に考えたところで、世界はその原則に従って拡大していくのだ。私が何を考えたところでアラブ人は石油を掘りつづけるだろうし、人々はその石油で電気とガソリンを作り、深夜の街にそれぞれの欲望を追い求めつづけるだろう。」現実の圧迫、人類の尽きない利欲のどうしようもなさ直面して、主人公はしかたなく脳の中の世界の終りに後退して守勢をとる。

しかし世界の終りでは人は故郷を失い、心を失って、音楽を聞くことも愛を得ることもできない。現実から逃れた世界のため欲望を捨てて、理想を抱かなくなると同時に生活の色彩も失ったのだ。世界の終りは理想のユートピアではなく、やむを得ない避難港に過ぎない。ハードボイルド・ワンダーランドは残酷だが多少は名残り惜しく、主人公は現実都市での最後の一日も離れ難いばかり……ハードボイルド・ワンダーランドで束縛を受けながら自由を求めるのと、世界の終りで肉体を抜け出して永遠に孤独を抱くのと、どちらがよいと断言できる人などいるまい。ましてやハードボイルド・ワンダーランドにも世界の終りにも「私」の捨て難い人や物がある。絶対的な意味でのユートピアはなく、絶対的な意味で醜い世もない。ただもがいて自分を捜し求め手かせ足かせをつけられたまま踊り出す美しい人生があるだけだ。

自分のやり方で村上春樹を理解すると、彼が彼のやり方で創作し感情を伝え、責任を負うかのようだ。彼はニヒルな個人主義者ではなく、生活して駆け回って、孤独を正視し、分析することで、個人の心に降り積もった辛酸の雨雪を払い、さまざまな若者に限りある祝福を与え、無限な可能性を創造しつづけているのだ。だとすると、心の中に隠れた世界の終りの存在に伴って、自分はいつでもハードボイルド・ワンダーランドに逃げ込める。都市のワンダーランドには依然として心を動かす音楽、人を魅惑するウイスキー、気怠いジャズ音楽を流すバー、そして喜んで耳を傾けて分かち合うマスター